

平成24年10月15日

保護者の皆様へ

子どもたちの生命と心を共に守っていきましょう

- 「いじめ」根絶のために -

練馬区立関町北小学校
校長 大野 泰弘

10月も半ばを迎え、深まりゆく秋を感じられる心地よい季節となりました。

保護者の皆様には、日ごろより本校の教育活動にご理解とご支援を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、この夏は、すでにご承知の通り、大津市の中学2年生がいじめを受け、昨年10月に自らの生命を絶ったという痛ましい出来事への対応について、様々なメディアで学校や教育委員会のあり方等が議論されました。

その後、9月2日には兵庫県川西市で高校2年生が、9月5日には札幌市で中学1年生が、そして、9月26日には都内品川区で中学1年生が自ら生命を絶つという報道がありました。その報道の中ではそれぞれの原因の根底にいじめがあったのではないかと指摘されています。ほかにもいじめに関する情報が各地から伝えられたのが、今年の夏でした。

自ら生命を絶った子どもたちは、来るべき自分の人生に、たくさんの夢や希望を抱いていたことでしょう。が、その夢だけでなく、自らの生命までも絶たざるをえない無念さ、悔しさ、悲しさ、あるいは、残されたご家族の沈痛な思い、悲痛な叫び、こういうことを考えるだけで、とても心が痛みます。

そこで、私は、子どもの心を傷付けるだけでなく、場合によっては、その傷の深さの余り、自らの生命を絶つという深刻な事態を招かないために、学校・家庭・地域社会でできることは何か、そのことをあらためて考えていく一助とすべく、本文書をまとめました。すでに、今月5日には東京都教育委員会のアピール文を配付いたしましたが、それと合わせて、お読みいただければ有難く存じます。

今後子どもたちが安心して本校に通い、楽しく充実した学校生活を営むことができるよう、「いじめ」についての基本情報を共有し、学校・家庭・地域社会の役割や義務、未然の防止策から認知後の対応方法などについて、今行っていることを整理し、今後できること、やるべきことを形にする、その一歩にしていきたいと考えています。

もとより義務教育を行う諸学校は、教育の目的を達成するため、子どもたちが各教科領域における基礎的な知識や技能を身に付けるだけでなく、自主・自律の精神、規範意識や社会性、公正な判断力や主体性、社会貢献意欲など、現在ならびに将来をたくましく、そして、豊かに生きていくために必要な心と力を体得していく場所です。

「みんな違って、みんないい」と言われますが、性格、趣向、考え方など、個性の違う一人一人が過ごしているのが学校ですから、子どもたちの日常生活には、さまざまな意見の違いや対立、あるいは葛藤や悩み等が存在しています。子どもたちが、それらを解決する方策を粘り強く模索したり、よりよい解決に至るための試行錯誤を繰り返したりして、豊かな心や人間力を身に付けていく過程においては、それらは心の成長に必要な、年代に応じた発達課題であると考えられます。それにより、子どもたちは、将来の実社会を生き抜いていく社会性や判断力、協調性や忍耐力、さらには社会生活上の規範意識やよりよい人間関係を築くことの大切さや難しさなど、人としての多様な力を身に付けていくことができるからです。

しかしながら、何らかの要因で、自分と相手とのわずかな違いを受け入れられなかったり、集団の中での自分の立場を守ろうとして仲間を排斥したりするといった、まさに自己中心的な感情や態度が高じ、自身の弱さやコンプレックス等を解消しようとするところから、そのはけ口、代償行為のような形で、特定の相手に対する「いじめ」が発生していくと考えることができるのです。

人間社会が築かれてから、いつの頃から、どのような経緯で、どこから「いじめ」が起こるようになったのか、その起源をたどってみても意味はないのかもしれませんが、これだけ科学が発達し、多くの未知のことが解明されてきても、今なお「いじめ根絶」には至っていません。それだけ、時代を超えて、人間社会というよりも人間個々の心に深く根ざしている問題の一つが「いじめ」なのでしょう。「いじめ」を他人事ではなく、自分の問題として捉えていくことが、学校だけでなく人間社会から「いじめ」を根絶していく方途の一つなのかもしれません。

人権教育の根本に、「いじめにつながる三つの『い』を見逃すな」ということがあります。これは、「いたずら・いじわる・いやがらせ」の三つの頭文字の『い』です。これらは、大人あるいは周囲の友達の目にも見えているものであって、被害者側からの訴えもあるはずですが、それを軽視することなく、**放置すれば大きな心の傷になると判断し対応することが大事です。**特に、**大人のアンテナ、心の感受性が問われているのです。**周りが「大丈夫？」と尋ねれば、いじめられている子は、まず「大丈夫」と答える傾向にあります。それは、相手が教師であれば「告げ口をしたと思われたくない」、保護者であれば「心配をかけたくない」、友達であれば「孤立したくない」等々、さまざまな思いがあって、そういう言動になるのです。

要は、そういう状況を確認するだけではなく、また、表面的な解決だけでなく、根本的に解決していこうとする**大人の側の本気度、真剣さ、あるいは一步もあとへは引かないといった覚悟のほどが問われているのです。**そして、その大人も孤立させず、学校内でいえば、組織的に対応する、また教師だけでなく、保護者や地域の方々、場合によっては関係機関や専門機関の方々とも連携を図りながら、一体となって解決していかねばなりません。学校に通う子どもたち一人一人の心に、人への思いやりとともに正義感も養いながら、悪に染まらず、善を行う行動力を育てることも求められます。「あなたを絶対を守る」という大人の真剣な姿を見せずして、いじめを受けている子どもたちに安心感、勇気、希望など、一体何が伝わるのでしょうか。

ところで、本校では、夏休み前に練馬区が行った「いじめ状況調査」において、認知できるいじめの件数は「ゼロ」と報告いたしました。放置すればいじめにつながる「見えていない種」、「育ちつつある芽」はゼロではないかもしれません。子どもたち一人一人の**努力やご家庭のご協力のお陰により「目に見えるいじめはゼロ」**ですが、もし、この認識が間違っていれば、すぐに改善に向けて動き出さなくてはなりませんし、幸いに正しいのであるならば、これからもずっと「継続」させていきたいと願うものです。

本校の教員には、すでに本資料のもとになるさらに詳しい資料を配付して、各学級・専科の中だけでなく、学校として考えられる取り組みを実施するよう指示しておりますが、お子様のごことで何か気になることなどございましたら、遠慮なくご相談くださいますようお願いいたします。担任も一人で問題を抱える時代ではありませんが、保護者の皆様もご家庭だけで抱える時代ではなくなったと言えるのです。「見えていない種」のうちに、あるいは「育ちつつある芽・見え始めた芽」のうちにしっかりとした対応をとって「いじめの根」を絶ち切り、子どもたち一人一人に**安心感**をもたらしてまいりましょう。それが子どもたちよりも少し長く人生を過ごし、生きる智慧をもっている私たち大人一人一人の責任です。関町北小学校に学ぶ子どもたち一人一人の学校生活が、安心でき、楽しく、充実した毎日となりますように、学校・家庭・地域社会・行政等が一体となって子どもたちの生命と心を守っていきたくて考えています。

皆様のご理解とご協力をお願いいたします。